

石川島記念病院 看護師 今泉直美、松井 智子

功 績 COVID-19患者の終末期看護において、患者さん・ご家族の思いを叶えるために組織に働きかけコロナ病床において、最後の時間を過ごせるように調整し、ご家族のニーズを満たすために面会を可能とした功績。

推 薦 者 看護部長 丸山 恭子

推 薦 理 由 COVID-19患者の面会は、感染防止の観点から一律禁止となっている中、患者さん・ご家族の思いを汲み取り、思いを叶えるケアの実践は、看護師としての使命感を感じるものであった。組織で決定した規則を超えて、患者さん・ご家族の思いを叶えるために、医師・看護師でカンファレンスをしながら、実践したことは、質の高い医療を目指した実践であったと思うので推薦する。

内 容

COVID-19感染後（中等症I）、11日目に発熱みられ入院となり重症化し、亡くなられた患者にケアを実践した事例である。

入院後、抗生物質、副腎皮質ホルモン投与、酸素療法にて症状はコントロール出来ていたが、入院後11日頃より酸素化の悪化を来し、ネーザルハイフローを使用開始した。

入院直後は、酸素療法・抗生剤などの治療により、安定していた症状が悪化、隔離生活への不安に対する看護計画を立案しケアを実践した。患者さんはご家族に毎日携帯で電話をすることで不安の解消を行っていた。

状態が悪化するにつれ、このままご家族に会えない状況で最後を迎えることになっても良いのかということ、医師・看護師でカンファレンスする中で、家族面会の実現に向け、組織に働きかけることになった。

急激に症状が悪化し最後を迎える状況の病状受容は「なぜこんな状況になってしまったのか」、「治療は大丈夫であったのか」など複雑な心理状態となる。面会はそのような複雑なご家族の心境を緩和し、患者さんの急激な病状の悪化の受容を助ける効果は大きい。患者さんにとっても家族面会は、病状悪化を確信することになったとしても、ご家族に思いを伝えて最後を迎えることで安らかな状態で最後を迎えることに繋がると考える。

今泉と松井は患者さんケアの中心となり、患者さん・ご家族のニーズに添うよう実践をしました。COVID-19感染症患者の面会は、殆ど一律禁止をしている中で、患者さん・ご家族の思いを汲み取り面会の許可を取るために組織に働きかけ、特例ではあるが実施可能にしたことは、患者さん・ご家族にとって意味のあるものであったと思う。後日ご家族からは、「思えば父も先生の治療と看護師さんの看護を受け、大変心強かったと思います。私たち遺族も、父の思い出を胸に抱きながら生きていこうと思います」という感謝のお手紙を頂いた。